Kiryu Junior College

看護学生の霊安室に対するイメージ

Mortuary Images of Nursing Students

砂賀　道子，鈴木　はるみ，澁谷　貞子

要　約

医療技術の進歩による在宅死の減少に伴い，病院死の割合は著しく増加している．自らの終末期の迎え方についての感心が以前に比べ高まってきている現代において，人が最期を迎える場所としての霊安室は，グリーフケアにおける重要な役割を持つ．これまで，看護師の霊安室に対するイメージを調査している研究は見られるが，看護学生のイメージについての研究は見当たらない．一般に，霊安室については否定的イメージが強く，冷たい印象を持たれていることが多い．そこで，看護学生は，霊安室に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにすることを目的とし，短期大学看護学科の新入生92名，2年生100名，3年生78名，卒業生73名，総計343名に自記式質問紙調査票を配付し調査した．その結果，否定的イメージの強い霊安室であるが，看護学生は霊安室に対しては，安らかで明るいという肯定的で，感覚的な印象を持っていることが明らかになった．また，霊安室は生から死への準備室の空間と想像し，生と死を分離する場で，悲しみや思いを表現できると考えていることが明らかになった．以上により，看護学生への死の準備教育への示唆の一助を得ることができた．

キーワード：霊安室，看護学生，死への準備教育

はじめに

死は誰にでも訪れるものであるが，死に対する考え方は個人によって，また置かれている状況や個人の体験によっても異なる．死をどう捉えるかは，その人が生きてきた人生観あるいは，死生観に影響される．現在，医療技術の進歩による在宅死の減少に伴い，病院死の割合は著しく増加している．死亡者数の約8割が病院で死を迎えている現代において，死はより身近なものとして捉えられ，自らの終末期をどのように迎えるかについても感心を寄せる人が多くなっていると言われている[1) 2)]．

死を否定したところに理念をおく医学では，患者の死は敗北を意味する．病院の死を覆い隠そうとする発想は，現在の死のタブー視と相まって，病院の構造や職員の意識などに現れる[2)]と相馬は述べている．特に，霊安室においてその傾向は顕著である．

E.S.シュナイドマンは“死は終わりを意味するが，遺族にとっては始まりを意味する”と述べている[1)]．死にゆく人とその家族の関係が親密であればあるほど，最期の時を共に過ごす場所や時間は大切なものである．遺族にとって始まりといわれる死をどのように迎えるかは，その後の遺族の死の受容・悲嘆からの回復に大きな影響を与える．霊安室は家族が改めて肉親の死と向き合い，実感するところである．混乱・悲しみ・時には怒りを包み込む癒しの場となる[3)]．人が最期を迎える場としての霊安室は，グリーフケアにおける重要な役割を持つのである．

これまで，看護師を対象とした霊安室に対する調査[1) 2) 4) 5)]はあるが，看護学生を対象としたものは見当たらない．今回，以前行った看護学生の死生観に関するアンケートから，思っていた以上に死別体験者が多く，霊安室に行った経験者が多かったことに着目し，人が最期を迎える場としての霊安室に対する学生のイメージを明らかにしたので報告する．

研究目的

看護学生の霊安室に対するイメージを明らかにすることで，死の準備教育への一助とする．

研究方法

1．調査対象

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

短期大学看護学科の新入生92名，2年生100名，3年生78名，卒業生73名の総計343名．（男性30名，女性313名）．ただし，卒業生とは2005年3月14日に卒業したが，調査日には3年在学中であった学生である．

2．調査期間

2005年3月10日から4月20日に自記式質問紙調査票を配布．調査に対する説明を行い，記入後にその場で質問紙を回収した．

3．調査方法

基本属性と死別体験の有無，霊安室に行った経験の有無・霊安室のイメージを自記式質問紙調査票を用い調査した．

1）基本属性

基本属性は，学年・性別・年齢とした．

2）死別体験の有無とその対象

3）霊安室に行った経験の有無とその理由・霊安室のイメージについて自由記載とした．

4．分析方法

記録内容の1つのまとまりを文脈単位として内容分析を行った．分析においては，複数の研究者間で繰り返し検討し，合意の得られた内容を採用した．

5．倫理的配慮

学生には調査の目的・方法について説明し，調査票記入の有無によって成績に影響することはないこと，この調査の依頼を拒否・中断する権利があり，そのために個人的に不利になることは絶対にないこと，研究としてまとめ公表する際には個人が特定できないようにプライバシーを保護すること，秘密は厳守する旨を調査票の表紙に文書で明記し，かつ口頭で説明し同意を得た．

研究結果

短期大学看護学生を対象とし，自記式質問紙調査票を配布した結果，回答が得られた343名中，有効回答は311名（回収率90.7％）であった．霊安室に関する質問に対しての有効回答は311名中，300名であった．

1．基本属性

対象の基本属性は表1に示した通りである．学生の性別は女子学生313名（91％），男子学生30名（9％）であった．学年別では新入生が68名（22％），2年生96名（31％），3年生76名（24％），卒業生71名（23％）であった．平均年齢は19.8±1.7歳である．

2．死別体験

身近な人との死別体験者は240名（77％）で，その人との続柄は，「祖父母」が最も多く160名（51.4％），次いで，友人27名（9％），「曾祖父母」24名（8％），「おじ・おば」17名（6％），「両親」10名（3％）「いとこ」2名（0.6％）であった．死別体験無しは71名（23％）であった（表2）．

3．霊安室の経験

霊安室に行ったことのある学生は58名（19.3％）であった．そのうち，身近な人との死別により霊安室に行った学生は49名（16.3％）で，ターミナルケアの演習で見学した学生は9名（3％）であった．霊安室に行ったことのない学生は242名（80.7％）で，そのうち，身近な人との死別体験があっても霊安室に行っていない学生は188名（62.7％）であり，死別体験も霊安室に行ったこともない学生は54人（18％）であった．（表3）

表1　基本属性　　N＝311

項目	カテゴリ	人数（％）
性別	女性	281（91）
	男性	30（9）
学年	新入生	68（22）
	2年生	96（31）
	3年生	76（24）
	卒業生	71（23）

表2　死別体験　　N＝311

項目	カテゴリ	関係	人数（％）
死別体験	有		240（77）
		祖父母	160（51.4）
		友人	27（9）
		曽祖父母	24（8）
		おじおば	17（5）
		両親	10（3）
		いとこ	2（0.6）
	無		71（23）

表3　霊安室体験　　N＝300

項目	カテゴリ	理由	人数（％）
霊安室体験	有		58（19.3）
		身近な人との死別	49（16.3）
		ターミナルケアの演習での見学	9（3）
	無		242（80.7）
		身近な人との死別あり	188（62.7）
		死別体験も見学もなし	54（18）

4．霊安室のイメージ

霊安室について回答のあった300名の記録から，文脈単位599，サブカテゴリ78，カテゴリ19，コアカテゴリ7が形成され，最終的に抽出されたコアカテゴリは，『暗く冷たいイメージ』，『静かで空虚なイメージ』，

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

『隔離されたイメージ』,『安らかで明るいイメージ』『生と死を分離するイメージ』,『未知の世界のイメージ』,『感覚のイメージ』の7個であった.(表4)

表4　カテゴリ表

カテゴリ	コアカテゴリ
暗くて寒いイメージ 冷たくじめじめしている感じ 怖いイメージ	暗くて冷たいイメージ
静かで寂しい雰囲気 空虚	静かで空虚なイメージ
霊安室の物理的環境 病院における霊安室の位置	隔離されたイメージ
安らかな場としての霊安室 明るいイメージ	明るく安らかなイメージ
生と死を分離する場 死別を悲しむ場 天国への準備室 死者との惜別	生と死を分離するイメージ
想像できない世界 メディアからの印象 生き返る	未知の世界のイメージ
臭覚からの感覚 聴覚からの感覚 色彩のイメージ	感覚のイメージ

1)『暗くて冷たいイメージ』

このカテゴリは，死体があり空気が重く，暗く，寒く，じめじめしているというイメージである.

2)『静かで空虚なイメージ』

このカテゴリは，静かで寂しく，切なく，孤独で空虚であるというイメージである.

3)『隔離されたイメージ』

このカテゴリは，霊安室の物理的環境や，病院における霊安室の位置を示し，端にある，地下にあるなどの場のイメージである.

4)『明るく安らかなイメージ』

このカテゴリは，安らかで神聖な場所，落ち着きがあり，意外と明るいというイメージである.

5)『生と死を分離するイメージ』

このカテゴリは，死を確認し，死別を悲しむ場であると同時に，魂が昇り，天国への準備室でもあるという生と死を分離するイメージである.

6)『未知の世界のイメージ』

このカテゴリは，実際には想像できない場所であり，生き返ったり，幽霊に出会ったりするメディアからの印象が強いイメージである.

7)『感覚のイメージ』

このカテゴリは，色彩（視覚）からの青・黒・白などのイメージ，聴覚，臭覚からなど感覚によるイメージである.

考　察

看護学生の身近な人との死別体験は，77%に上る.霊安室に行った体験も19.8%と約5人に1人が体験しており，平均年齢が19.8歳ということから考えると，とても多い体験である.

先行研究[1) 2) 4) 5) 6)]によれば，霊安室に対して看護師は「冷たい」,「暗い」,「不気味」などマイナスのイメージを持っており，遺族にとっても「寒々した」「殺風景な」「狭い」などの印象を与えており，ほとんどの看護師は遺体を安置する場，弔う場として十分に霊安室は整えられていないと報告している.

看護学生の今回の調査から得られた7個のコアカテゴリの中では,『暗く冷たいイメージ』,『隔離されたイメージ』,『未知の世界のイメージ』など，マイナスのイメージの強いカテゴリが一致する結果となっている.

同じく，相馬による看護管理者の認識に関する調査[4)]では，霊安室は神聖で落ち着きがあるが，冷たく暗いというイメージを持っていると報告している.それには看護管理者の理想とするイメージと，所属する病院の実態から抱くイメージの両方が含まれていると述べている[4)].

霊安室のマイナスのイメージは，日本における死に対する考え方に影響されていると考えられる.死は生きることと表裏一体であるだけに，生への執着が死への恐怖となり，日常的に死を忌み嫌い，タブー視する傾向が強い.医療の現場でも，生きることへの切望が医療技術を目覚しく進歩させた分，患者の死を敗北とする考え方が根強く存在すると守山は述べている[6)].霊安室の場所を病院の端や目に付きづらい地下に設置し，人目に触れず移送することに都合の良い場所を選ぶことなどはその顕著な現れである.看護学生も霊安室に行く体験の中で，そのような霊安室の場所的な雰囲気を感じとっていると考えられる.

また，メディアからの印象も強いことが伺える.特に，低学年にその傾向があった.低学年は，死に対し直接的に関わることが少なく，死について考えることも少ないため，現実の死を考えるよりも，メディアによるイメージに左右されやすいと推測される.

一方，霊安室に対する『明るく安らかなイメージ』というプラスのイメージは，死別体験の対象者が祖父母に多いことを考えると，死はつらく苦しい闘病

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

生活からの解放と捉え，争いや病苦のない世界に確実に到着することができるという肯定的な捉え方ができるのではないか．また，メディアの影響などから，死後の世界は明るい天国のイメージがあることによるのではないかと考えられる．

藤腹は看取り，看取られるための心得と作法の原点は，双方の“生死観”にあると考えられる．人は必ず死ぬ存在であり，私自身もいつか必ず死ぬと言うことを前提として，何を大切に，人生をいかに生きるべきか，どのような最期を迎えたいかという自身の考え方や受け止め方，価値観を明らかにしたものが生死観である．生死観を育みつつ生きることは，この世に生を受けた者としての務めであると述べている[7]．生と死に関しては生死観，死生観と個人の価値観によってその表現は異なるが，将来看護職を目指す学生にとっても，自らの生と死に対しての価値観を持つことはとても重要である．

死に対する考え方として，自分にとって死は「終わり」と捉えている人が多いが，自分の死を考えるときにマイナスの感情を抱く人ほど，死の意味を終わりと捉える傾向がある[2]と言われている．

柏木も死後の世界を信じることができる人は，より平安な末期が迎えられるが，死を終わりと捉える人にとっては，死の過程での苦しみは耐え難いものになると述べている[8]．

しかし，岸本は死を生命の終わりと見，今ある人生を良く生きることで，死に直面しながらも生きる目標を失わず，死の恐怖に打ち勝つことができた．死を別れの時と考え，毎日を大切にし，生きがいのある生活を送る，そのことが生の問題の最上の解決になり，死の問題の解決にもなると述べている[9]．

死を終わりと捉えることも，死後の世界を信じることも，個々人の死生観として，多様な考え方があって良いのではないかと考える．特に看護学生にとって，死は身近なものではなく，日常的に死について考えることは殆どないため，自らの死生観について考える機会を与えることは重要である．

死の準備教育においては，そのような学生の状況を考慮した上で，多方面から死を捉えられるような教育が必要である．死をタブー視せずに直視することは，限りある命を大切に生き，生かすことの意義，そして死ぬことを見つめなおすことにつながると守山[4]も述べている．看護学生に死生観について真剣に議論する機会を与え，既成概念にとらわれない自由な発想を促していくことが，人の最期を看取ることの多い看護職者としての資質を高めていくことにつながると考える．

結　論

看護学生の霊安室に対するイメージは，『暗く冷たいイメージ』，『静かで空虚なイメージ』，『隔離されたイメージ』，『安らかで明るいイメージ』『生と死を分離するイメージ』，『未知の世界のイメージ』，『感覚のイメージ』であった．看護学生に対する死の準備教育において，生と死を見直し，個々の死生観を育むことが重要であると示唆された．

本研究の限界と今後の課題

今回の研究では，死別体験した年齢や，死別した家族との同居の有無，霊安室のイメージの元となった出来事やその理由については調査していない．幼少期の死別体験であれば，詳しい状況についての理解はできていなかったかもしれないし，記憶として残っていないことも考えられる．死別した家族との同居の有無については，間近で闘病生活を見てきたか否かで，イメージは変化すると考えられる．また，今回の学生の霊安室入室の動機は，純粋に身近な人との死別であった学生ばかりではなく，ターミナルケアの演習として，極短時間に見学したのみである学生も含まれている．動機の違いにより，霊安室のイメージに影響を及ぼしているところもあると考える．

今後は，学年進度の違いなども含めて調査を行い，研究していくことが課題である．

引用文献

1）相馬朝江：死後のケア，霊安室に対するナースの認識．ナースプラスワン，3（9）：30-33，1993.

2）相馬朝江：死と死の周辺の課題．現代のエスプリ，378：43-52，1999.

3）相馬朝江：臨終から退院までの看護-グリーフケアの視点から-．看護管理，9（3）：197-201，1999.

4）相馬朝江，山口利子ら：霊安室ならびに死後のケアに対する看護管理者の認識．日本看護研究学会誌，16（2），1993.

5）山口利子，相馬朝江ら：病院における霊安室の実態．日本看護研究学会誌，16（2），1993.

6）守山伸子：死者への畏敬の念と遺族への配慮を．看護管理，9（3）：172-177，1999.

NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

7）藤腹明子：日本の文化と看取りの作法．死の臨床．28（2）：149，2005.
8）柏木哲夫：生と死を支える．朝日新聞社（東京），1983.
9）岸本秀夫：死を見つめる心．講談社（東京），1967.

Mortuary Images of Nursing Students

Michiko Sunaga, Harumi Suzuki, Teiko Shibuya

Abstract

With the decrease in in-hospital mortality rate due to advance in medical technology, out-of-hospital mortality rate has been significantly increased. In comparison with past days, people have shown great interest in end of life issues (how they prepare themselves to have peaceful end of life) at the present days. Accordingly, a mortuary plays important role in the grieving care process.

The studies on mortuary images of nurses are available, but no study has been conducted on the image of nursing students. Generally, most people have strong negative image and cold impression on mortuaries. Therefore, we conducted this survey aim at clarifying how nursing students picture mortuaries. Self-questionnaire sheets were distributed to total 343 subjects of 92 freshmen, 100 sophomores, 78 seniors and 73 alumni belonging to nursing department of junior college.

From the survey, it has become clear that the subjects have positive and sensuous image (peaceful and clear) on a mortuary, although a mortuary gives strong negative image. The survey also indicate that the subjects imagine mortuaries as the transition state from life to death and as the boundary of life and death in which grieves, feelings and considerations can be expressed. The result of this survey suggests the importance of providing death preparatory education for nursing students.

Keywords: Mortuary, Nursing students, Death preparatory education

NII-Electronic Library Service